

# 第五十回 横浜能 記念講演

平成十四年十一月二十八日

## 謡曲愛好者の皆様へ

横浜能楽堂 館長

山崎 有一郎

**講演に先立ちあいさつ**  
 横浜能楽連盟 会長 新堀 豊彦

五十年続いてまいりました横浜能が、昨年九月で本当に五十回を迎えました。お蔭様で三日間無事に演能が済みました。また、五十一回からは、少しやり方を変えて継続して行くわけでありましたが、いずれにしましても能楽連盟としては大きな肩の

荷が下りた感じがいたします。今日は、山崎館長に「謡曲愛好者の皆様へ望む」というお話をお願いいたします。山崎館長は、申し上げるまでもございませぬが、このところ能楽堂は、すばらしい企画をどんどん打ち出しておりまして、特に「秀吉が観た卒塔婆小町」という大変な実験をされました。四〇〇年前の能をこの舞台で完全に再現をされたわけです。

また、狂言の世界で仲々普通の舞台では見れない特殊なものを次から次へとやっていただいております。今や横浜能楽堂は日本一の企画力と実績をもつた能楽堂に発展いたしました。それは一に山崎館長の深い造詣と経験のなから生まれたものでございまして今日のお話は、大変楽しみにしております。それではどうぞお願いいたします。

連盟の皆様へ、まずもって厚く御礼を申し上げたいと存じます。この横浜能楽堂が出来ましたのは、横浜能楽連盟の皆様方の並々なぬお力だと思えます。その初代の館長を命ぜられましたから、何とかそれにお応えしたいということで、今日まで懸命に、文字通り無我夢中でやってきました。

ます。ともかく他の能楽堂ではやらないようなことを、積極的に実行して行こうと考えております。この場を借り、いつそうのご協力をお願い致します。

例えば「能の会があるが観に行かないか？」と言うと、「お能か、あんな眠くて退屈で、つまらないものは、どうも……」と言うので、能を観たことがあるか尋ねると、「一遍も観たことはない」と返って来る。

一遍も観たことのない人が、こう言うんですから、これはどうも恐ろしいことですね。何処かで間違った先入主が、こうし

た「食わず嫌い」を作ってしまったのでしよう。

そこで是非、何とか「能に親しみを持つて頂きたい」それにはどうしたら能楽堂へ足を運んで頂けるか、そこからの出発でした。

「能とは何か？」といった本質的なことより、まず「能楽堂に足を運んで貰おう」という狙いの企画で始めました。

その為の話題作りもいろいろやって参りました。私共（事業担当係長も）新聞記者出身ですので、「新聞作り」と同じ筆法で「見出し」でまず人を引きつけ、中身で「勝負する」ことにしました。

新聞・雑誌の「見出し」、書籍の「書名」で、パッとぶつけて注目させる。中身を見てから買う人はいない、見出し・書名だけで買うはずですよ。

例えば「能楽史」の講座も、



講演される山崎会長  
14.11.28

へ能楽史事件簿としてはどうか？チラシを作った段階で大手出版社三社から「本に纏めたい」と申し出てきたのには、まさかと驚きました。しかも最もそれらしからぬ岩波書店が加わっていたのには、心底驚かされました。

嬉しいことです。結局、岩波から出版され、上々の売れ行きでほっとしております。無論、講座そのものも面白かったのですが、本になってから読むとまた違う意味での面白さが加わって、良かったと思えます。

つまり私共の仕事は後に残らなければ何にもなりません、瞬間的に全部なくなってしまう仕事ですから、せめてこういう形でなりとも、残して置きたいという事です。

ここで、皆さんにお礼を兼ねて一つ私が下手な替謡を謡って見ようかと思えます。

へ紅葉山閑かにて。影を映せる

能楽堂。命のうちに通はんと市内市外より。貴賤男女の隔てなく。げにや普段着の襟に印の花を付け。能楽堂さして集ひ来る。市民の心ありがたや市民の心ありがたや

(拍手)

これはご存じ「高砂」の「四海波」の替謡で文句を替えて、即興で作ったものです。

恥じを忍んでこんなことをしたのには理由があります。と申しますのは、「謡」はまず「へ節」を覚えることが先決なのです。節を正しく謡っていれば、文句は自然に付いてくるものなのです。これは父（楽堂）の口癖でした。

私は父の命で五歳の時、名人喜多六平太の門に入りました。その時、謡本に仮名を振って貰ったので嬉しくて一生懸命文句を覚えていましたら、「文句はどうでもよい、節を覚えよ」と

言われました。つまり、節さえ覚えてしまえば、例え文句を忘れても、イロハでも、ABCでも謡っていけば、必ず文句は自然に出て来るといいます。

私は東京の朝日新聞社に入社して間もなく、支那事変が拡大し、戦意高揚のための少年雑誌創刊のために、大阪本社に転任を命じられました。忘れもしない、昭和十七年四月十八日の朝でした。十七日の夜行で東京を発ち、翌朝大阪に着き本社に入ったのですが、間もなく辺りは騒然として来て、東京からの新転任記者など見向きもされませんでした。実は東京の初空襲のあと、関西にも警報が轟いていたのでした。

そうした騒ぎの中で住居を見つけないければならず思案していたところ、大先輩の栗林貞一さんとと言われる能楽評論家、実は朝日の大先輩、当時は調査部長をしておられた方ですが、入社以前から昵懇にして頂いていたので、早速、家のお世話をして頂いたのです。それが又、一軒おいた隣でしたので、これ幸いと謡を教えて頂くことにしたのです。

私の大学の卒論は『シテ方各流の謡の相違』でしたので、各流の稽古はひと通り習ったので

すが、金剛流だけは師匠が手近にいないと習いそこなつてしまったのです。それで栗林さんにお願したという訳です。素人師匠は教えたがるものなので、二つ返事でした。それも、時には夫婦ともども夕飯付きのお稽古でした。

師匠には「君は筋がいいよ」などと褒めて頂いていたので、大いに気を良くしていたのですが、夜勤で遅くなったある日、これも先輩の演劇評論家で学芸部のデスクをしておられた北岸佑吉氏から「君は金剛を始めたようだね」。「栗林さんに聞かれましたか?」。「ああ、栗林さんが感心していたヨ、さすが山崎君だ、私が教える前からコンゴウ流だ」と言われていた」と言うのです。皆さんお判りでしょうか?

それには、いささか面食らいましたが、北岸さんの奢りで南へ繰り出しメートルをあげました。そこで再び一曲。

酔うては帰る千鳥足。酔うては帰る千鳥足。周りの友こそ立ち騒げ我が家の妻のふくれ面この夜何と済まさん。更け行く月こそ哀しけれ。酔も覚め気味や。先づ言訳に心せよ。さのみなど気おくれの憂き妻のみぞ待つらん。待つ妻夜更

けの門にわが妻の影を見るこそ苦しけれ影を見るこそ苦しけれ (拍手)

これもお馴染み「松風」の替謡で、先に申したように、謡の「節」をまず覚えて頂けば、すぐにでも謡われるものです。

私の学生時代は、例の華やかな早慶戦で、仲の良い友人と応援に行つたのはよいのですが、この友人はバカ声で応援歌を歌うのですが、これがまた凄惨な音痴、近所迷惑な話でした。一緒に行つた私まで白い目で睨まれてしまいました。

ところがある日、その友人を初めて梅若の能を観に連れて行つたところ、滅法面白がったのに驚きました。それで何に興味を持ったのか聞いてみますと、鼓の音だったので。四国高松の出ですが、祖父が宝生流の謡をやり、祖母が小鼓を打つていたことを、子供の頃の耳の何処かに残っていたものでしょう。彼は梅若武久師(後の雅俊)

につき、卒業迄に「小袖曾我」と「小督」の二番の能を勤めました。音痴どころか堂々たるモノでした。

謡には音痴はないのでしょうか?それは何故でしょうか?謡の発声は下腹に力を入れ、腹から声を出さねばなりません

ので、勢い腹式呼吸で声を出すことになり。喉元で出す小唄のような発声では音痴になり易いのですが、大きく十分に吸った息を堂々と出せば、音痴にはならないのです。「謡に音痴はない」と定義付けられる所以です。

それでも「音痴の謡」があると言うのは、「本当の声が出ていない」証拠です。「正しく声が出せれば音痴はない」と言い直せば良いでしょう。

この中には金春流の方もいらつしやると思いますが、金春流の発声は、「口を大きく横に開けよ」と言われ、私の師匠・野村保師の修行時代のこと、稽古をしていたら、いきなり桜間伴馬(弓川の父)師が保師の後ろに周り、両中指で口を広げ「謡って見る!」と言われたそうです。金春の謡は十分腹に力を入れないながら声を感じさせないふつくらした謡にしなければならぬのです。

その頃、もう一人友人(法政大学生)に音痴がいたので、私の師匠野村保師を紹介し、弟子入りさせましたところ、これもまんまと音痴でないまともな謡を謡っていました。その時の謡が「天鼓」でしたので、もう一つ。

打ち鳴らす笛太鼓。打ち鳴らす笛太鼓。鎮守の森は。どこ。打つなり打つなり囃子の音に。舞ひ舞ふ氏神の祭の神楽は面白や (拍手)

実は学生時代にいろんな「謡遊び」をしたものです。最も熱くなつたのは「しり取り謡」なのです。

これは完全に謡を知っていないと出来ません。一句謡つた最後を打切に謡って、次の人に渡します。次の人は打切の間に次に付ける謡の句を考えて継ぎまです。尤も今「やれツ」と言われなくても出来ませんが……。

それに近頃の謡会では見台を使うようですが、あれでは謡会にはなりませんね。見本(けんぼん)つまり謡本を見ながらですから謡っているのではなく、謡会ではなく、読み会です。(笑い)

読むとなると、舞台では禁制の眼鏡もかけなければなりませんし、謡本を読むには背を丸めなければならず、とても背筋を延ばして、腹から声を出すことなど出来ません。

〔注〕眼鏡のほか腕時計・指輪・耳飾りなども禁制〕  
我々の頃はすべて無本です。従つて役の者は全曲暗記しなければなりません。地謡は地謡ど

ころだけで良いはずですが、やはり役謡も覚えていなければなりません。

と言つてもなかなか完全には覚えられません。そこで文句を忘れてもへ、節々さえ覚えていれば文句は付いてくる、というフレーズが生きてくるのです。尤も今日の、この後の謡会も見本でしょうが、仕方がありません。

次の話題に移りましょう。今のワキ方下掛宝生流の宝生閑師の祖父・新先生は十代宗家で、近代の名ワキ師の誉れ高い人でした。師の長男と私は同い年でした。学校も早稲田で一緒でしたが、彼とは大学の中で会ったことはなく、いつも喫茶店の前をウロウロしている時でした。彼の名は英(ひで)、卒業後間もなく夭逝し、彼の舞台は遂に見ませんでした。

息子のことはともかく、この新師に、かの有名な文豪夏目漱石が新師に習っていたのです。漱石『日記』にも「今日も新来らず」などと幾つか記されていますので、どうやらしよつちゆう稽古は休んでおられたようです。多分前の晩、良い所へ行き帰られなくなったのでしよう。その頃、内弟子に富山から連れてきた天才少年で、後で人間国

宝になった松本謙三師がおられました。

謙三師の話では、新師宅へ稽古に見えられる素人のお弟子さんへの言い訳に苦しみ、その上内弟子は師から直に稽古を受けるのではなく、廊下の隅で素人稽古を聞きながら修行したのだと、話されていました。

当時は松岡子規や河東碧梧桐も漱石と同門(宝生新門下)で、ある時、赤坂の星ヶ岡茶寮で一杯飲みの謡会をしている時、酒の上の戯れで新先生は謡の後、「舞えッ」と言われ咄嗟に「三笑」を舞つたのだそうです。その時の話を新先生から伺いました。

新先生から「地をお願いしませ」と言われたお三方、全く地謡が続かず途中で絶句連発、新先生は「仕方がないから私は謡いながら舞いました」とおっしゃりながら「偉そうに仰る先生方も謡を謡わせたらくくダメですな」——これが仰りたかったのでしょうか。

脇方には「脇仕舞」という特別の仕舞があるのですが、新師はわざと意地悪くシテ方仕舞の少々遠い「三笑」を選ばれたのでしょうか。

さて、その漱石の謡の事をお尋ねしますと、「漱石さんの謡は上手でした、大変色気のある良い謡で、百番くらいは挙げて

おられましたヨ」ということでした。尤も夏目家での謡会に出た人の評が「漱石日記」に載っています。それによると「坂元雪鳥の謡は女のような細い声で、楽堂の謡は狂言みたいな声だ」とありますが、これはちょっと可笑しいのです。

実は、父の父即ち私の祖父・九一郎は大蔵流の狂言を嗜み、今の大蔵流宗家弥右衛門の実父久治(後の名人、善竹弥五郎)と先々代茂山忠三郎良豊の兄弟弟子で、久治は玄人、祖父は素人の修行でしたが、そのことを漱石が知っていて父も狂言を習っていたような錯覚を持たれていたのでないでしょうか。

同じ漱石門下の野上豊一郎先生は法政大学の総長をしていらして、今や権威のある法政能研(法政大学能楽研究所)の産みの親でもあります。と申しますのは……昨年五十周年を迎えたので、野上先生ご他界の後の創立なのです。

野上先生は早稲田大学の演劇博物館風の能楽博物館の構想を抱いておられたと思います。先生の奥様は有名な作家、野上弥生子さんで、ご夫妻と父が昵懇でしたので、私は子供の頃から日暮里のお宅へも遊びに行き、可愛がって頂きました。彼方のご長男(イタリア語学者)と私

が同い年であったので、よく遊んだこともありませう。

そんなことで法政能楽博物館の構想を打ち明けられ、その仕事を手伝う段取りになっていた矢先、先生の排訴運動が学内で起り、中止されてしまいました。だが、先生の御意志を継いであ

たのが今の法政大学能研を作ったのです。「ホトトギス」主宰の高浜虚子先生に誘われて野上ご夫妻が金春流の桜間弓川(当時の金太郎)の能を觀に行かれ、大感激し、それ以来金春流というより弓川の大ファンとなり、先生は急角度で能に傾斜されて行かれたと思えます。例の名著「能の発見」もその後の出版です。

尤も能楽研究の歴史は浅く、世阿弥の著書が発見されたのが明治末で、それからですから、思えば近來随分盛んになったと思えます。

それはともかく、野上ご夫妻のご覧になったのは「道成寺」で、野上先生は「これだけのしつかりした心霊的な美に満ちたものは、他のどんな芸術でも表現し得ないものを、世間の多くの人は、能は貴族と金持ちの消暇的遊戯としか思っていない。而して知らないで反感と軽蔑を以て当今、日本にある尤も美しい芸をネグレクトしている。こ

れは寧ろ彼らの恥辱である。同時にこの能楽を健全に保存し、有意義に鑑賞しようとするには事実その手に汚されている貴族と金持ちから奪って真に教養ある高き趣味の知識人の手に収めることだと思ふ」と言われた。そして弥生子先生も「これほどの立派な芸術が今日まで、その場限りの空間に消えるに任せて研究もされず、放置されているのは遺憾である」と書いておられます。

能楽研究の歴史というほどの歴史はまだなく、例の世阿弥の著書が発見されたのが明治末ですから、それからの研究なのです。思えば近來、随分盛んになり、大いにその成果も上がっていると思えます。昨年六月に遅れ馳せながら「能楽学会」が発足しました。

この間(平成十四年十一月九日)この舞台で、お目につけた「秀吉の見た『卒都婆小町』」なども、この実験能の一つで、この舞台の一つの記録を作りました。学者諸君と演者たちの真剣な研究成果の発表となりました。尤も、この能楽堂は研究発表の場ではなく、あくまで能・狂言の場であるべきで、そのためには出来るだけ多くの市民が能楽堂へ足を運ばれることが望みなので、その目的のために数々の企画を立て実行してきました。

例えば年の暮れになると猫も杓子も「第九」、「第九」と騒ぎ立てるのは、日本人としてはおかしくありませんか。

日本人なら「正月に『高砂』を謡おう」運動を始め、大人気でした。五年続けた成果は十分手応えあったと自負しております。さて、少々古い話で恐縮ですが、私が中学時代、高校受験に金沢へ行ったのですが、ここは有名な「天から謡が降る」と言われたほどの「能どころ」。街行く岡持ちを肩にした魚屋のあんちゃんも鼻唄ならぬ「鼻謡」で自転車走らせれば、大雪の中でお腹を毀し、薬局へ飛び込んだものの、中から謡の声は聞こえていても誰も出て来ないといった体でした。

ところが十数年前のこと、金沢能楽堂で講演を頼まれ、駅前でタクシーを拾ったものの、能楽堂を知らなかったのには、些か驚きました。県主催の講演会でしたので、このことを話すと「近頃土地の者さえ能とは縁遠くなって……」とこぼしてしまいました。

どうしたものかと相談を受けたので、「ある期間、土曜の午後とか夜、平易な曲を選び、低料金で見せたら……」と提案したところ、何日か経って、係の人から「漸く実施に漕ぎ付けま

したが……」と苦心談を聞くと、どの演者も「そんな低料金の能の舞台に立ちたくない」ということだったようです。演者のプライドでしょうか。

そろそろ結びの時がきたようですので、最後に申し上げたいことは「老後の楽しみ方」ですが、私などは月に二、三回、気のあった仲間数人と、家庭麻雀を楽しんでいます。人数が揃わなくては出来ません。その点「謡」なら一人でも二人でもまた大勢でも意のままです。

ある時、知人に「謡」を勧めますと、「定年になって暇ができたから始めるつもり」だと言うのです。これはダメです。「金が溜まつたら貯金しよう」というのと同じで、絶対溜まりませんから貯金はできません。金は借金してでも溜めなければ、貯金はできません。稽古事も「ない暇」を無理やり作らなければ、とてもできません。

そして若い時に苦しんでも稽古しておかなければ大成しません。若い時は暇も金もありませんが、気力がありません。歳をとると覚えは悪く、回転も鈍く、興味より嫌気が先になるのであるべく若い時に始めるのが良いと思います……といっても手遅れですか。

若い時に苦勞して身に付けた

ものは、たとえ中断しても決して忘れてはいません。すぐ復活します。例えば水泳や自転車操作用も同じことです。

謡を稽古しておられる方には是非申し上げたいことは、「謡」は「能」の（脚本）であり（台本）ということ。従って謡本の文字とゴマ節を追って、喉の快感を味わっているだけでなく、曲の筋を追ひ、役の中身を把握し、能の舞台面を頭に描きながら謡って頂きたい。それにはまず、能を「観る」ことで一にも二にも（観能）と頭に叩き込んで下さい。

私はよく、謡の師匠を紹介して欲しいと頼まれますが、その時、「先ず、能を十番くらい観なさい」と言うのです。それから習い始めると、随分違ったものになります。心に留めておいて下さい。

そしていよいよ最後に、皆さんにお願いしたいことは、是非能の「観巧者」になって頂きたい。謡を嗜む方々の一人一人が「能評家」になって頂きたいのです。能は批評家のためにやっているのではなく、一般大衆のモノなのです。従って皆さんの厳しい批判が「能」の質を向上させる、大きな力となることを期待して、この拙い私の話を終らせていただきます。（おわり）

「第五十回横浜能」

ご苦勞さん会

平成十四年十一月二十八日  
横浜能楽堂本舞台 開洋亭

次 第

- 第一部 山崎館長講演
- 第二部 各流競演素謡会
- 第三部 懇親パーティー

番 組

(金春流)

素謡 加 茂 ミチ 土屋 政雄  
シテ三浦 重信  
ワキ森 一  
地頭 吉岡 正雄

(金剛流)

素謡 敦 盛 シテ 桑 亮一  
シテ 望月 悦夫  
地頭 和田 完一

(観世流梅若会)

連吟 羽 衣 シテ 佐甲 富江  
地頭 堀内万紗子

(宝生流)

素謡 松 風 シテ 新堀 豊彦  
シテ 高橋 利雄  
ワキ 渡井 蘭子  
地頭 秋山 尚

(海謡会)

素謡 山 姥 ツレ 井実 昭子  
シテ 岡 幸男  
ワキ 松島 正義  
地頭 原 博之

(観世流梅若会)

連吟 小 鍛 冶 シテ 森田 英男  
シテ 杉山 淑朗  
地頭 鶴沼 昭吾

(喜多流)

素謡 鞍馬天狗 子方 杉山 昭二  
シテ 富樫 哲夫  
ワキ 宮地 光之  
地頭 松田 憲二

(観世流)

素謡 猩 々 シテ 高岡 幸彦  
ワキ 藤本 圭佑  
地頭 坂東 輝夫